

力を獲得していく。政官スクラム型リーダーシップは、行政の組織能力を育んできたのである。

だが、村松は、この政官スクラム型リーダーシップが九〇年代に動搖し、二〇〇〇年以前にはすでに崩壊していたと論じている。行政学者の眞渕勝も、現役高級官僚の意識調査を実施し、八〇年代半ばから「調整型官僚」とは異なるタイプの官僚が現れるようになり、二〇〇一年の調査では、それがさらに増えたと指摘している。この変化は、その頃には、政官スクラム型リーダーシップが崩壊していったという村松の観察とも、おおむね一致している。眞渕は、この新しいタイプの官僚を「吏員型官僚」と呼んでいる。

「吏員型官僚」とは、どういった官僚なのか。

従来の「調整型官僚」は、政治の調整過程の中に積極的に乗り出し、行政独自の立場や利益を主張することもあった。これに対して、「吏員型官僚」は、官僚の役割は政治によって与えられた政策の忠実な遂行であると信じ、自ら調整には

乗り出さず、政治が方向性を指示するのを待っているというのである。

つまり、上司から言われたことしかや

らない官僚が、増えてきたというのだ。

そのような吏員型官僚には、人と人との間の関係を調整したり、集団で協力して未知の課題を克服したりする能力などは期待できない。吏員型官僚が増えれば、行政機関の組織能力が低下することは避けられない。

眞渕は吏員型官僚が八〇年代半ばから増えてきたことを確認しているが、吏員型が増えたのは、行政機関内だけであるとは考えにくい。

おそらく、この頃から、日本中で、組織能力の低い吏員型が増えていったのではないかだろうか。吏員型の蔓延とともに、行政のみならず、政党も企業も学校もおかしくなっていったのだ。

元来、組織能力は、日本人の長所とされていたはずであった。その組織能力が衰退していく、日本の政治・経済・社会が低迷し、閉塞するのも当然であろう。それが「失われた二十年」の根本原因で

ある。

昨年末、民主党政権は、その組織能力のなさをもろに露呈して瓦解した。代わりに成立した安倍政権は、民主党政権と比べて、はるかに組織能力が高い。また、今までのところ、行政改革にそれほど高い優先順位を置いていないかに見える。しかし、今後はどうだろうか。参院選前までは、自民党は選挙を前に結束し、組織能力を高めていた。だが、参院選後は、選挙という求心力はなくなる。

一方で、消費税増税や、TPP（環太平洋経済連携協定）、中国との緊張、世界大不況など、内外の問題が山積している。いずれも、政官の高い組織能力がなければ克服できない難題ばかりである。安倍政権は、この二十年で失われた「政官スクラム型リーダーシップ」を新たに構築しなければなるまい。

しかし、それに失敗した場合は、どうなるか。

その時、安倍政権は、行政改革の旗を高々と掲げていてはどうう。

心身を磨き、徳性を担う「武道」の本質

荒谷卓

（明治神宮至誠館館長）

1959年秋田県生まれ。東京理科大学を卒業後、陸上自衛隊に入隊。2004年、特殊作戦群の創設にともない初代群長。一等陸佐。09年より現職。鹿島の太刀、合氣道六段。著書に「戦う者たちへ」。

私が館長をつとめる明治神宮武道場至誠館では、「神道と武道を通じた日本文化」を学びに来る海外の方が年々増加しております。彼らの大多数が「相手のことを自分のことのように思い気遣う」日本のすばらしい文化、特に、戦いであるはずの武術の稽古においてさえ、日本人が相手にたいする心遣いを忘れないことに心を打たれるといいます。

また、キリスト教では「いかに死ぬか」を重視するのに対し、神道では「いかに生きるか」を重視し、過去も未来も「今」に凝縮されているのだから「今このときに力を尽くすこと」が大事と考えることに賛同してくれます。そして、天

国は別にあるのではなく、この世を天国にすることこそが、自然（神々）と一緒にとなり宇宙の生成活動に参画することになるという考え方を、創造的で社会の活動を生み出す素晴らしい思想であるといいます。

生活、仕事、日常の万事において、人のために心を尽くし、共に協力して一所懸命生きる。そうした日本文化を、武道を通じて実感して感銘を覚えるのです。

彼らによれば、自國でも、そうした心を人々は持つてはいるが、それ以上に合理性や功利性が優先され、心情的結びつきは法的契約関係に押しのけられるといいます。

「葉隱」の影響もあってか、「武士道とは死ぬこと」という先入観があるようですが、「いかに真心を貫徹して生きるか」が武道の本旨です。そのためには、死に直面しても、真心を貫徹するように、との思いが、このような表現になつたのであります。意志を貫徹せんとする生き方こそが、武道の求めるものです。

そして、その意志とは、「社会のため、人のために精一杯己の力を尽くす」という真心の発動であり、合理性や利益や規則にも優先して、それを実践しやり遂げる心身の力を養うことこそが武道だと考えます。

では、なぜ、武道を通じてそのような心身が磨かれるのでしょうか。実は、私自身、最初は全く気がつかなかつたのですが、自衛隊に入隊し、数十カ国との軍事交流等から、夫々の国の伝統武術も含め、彼らの「武力、武術」の目的は、明確に殺傷と破壊以外ないと知ったことで、日本の「武力、武術」の考え方方が本質的に違うということを実感できたので

す。

心身を磨き、徳性を担う「武道」の本質

日本の武道が、他の国の武術のように殺傷目的に特化されなかつたのは、武術修養の目的を、道徳規範である「社会と他者への貢献」としてきたからです。つまり、道徳規範と武術鍛成は一体として成立してきました。徳川は儒教を、北条は禪を武道に取り入れましたが、それ以前の物部氏、大伴氏等氏姓制の時代から、もののふは日本文化の徳性を担つてきました。

その起源は、日本神話にあります。

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあたりました。交渉に応じずに戦を挑む神に対しては、武力で圧倒しつも、相手を殲滅するようなことはしませんでした。

勝敗がつき相手が降参すれば、その尊嚴を失わないように丁重に処遇したのです。

我身さへ富貴ならばと、他より一段振舞はんと成行けり」とあります。

つまり、人はどうであれ自分さえ安楽ならば、との利己心が百数十年に亘り社会を徹底的に破壊した武力による自由競争時代にも、一部とはいえ武道はその道徳性を失わなかつたといふことです。実力手段である武道が道徳性を維持できたからこそ、再び倫理的秩序のある社会を取り戻せたのです。

この日本人の勇気ある道徳観は、先の東日本大震災において世界中の人々が目の当たりにしました。世界は、崇高なる社会道徳の実践に感動しました。米国の大手研究機関AEI（アメリカン・エンタープライズ・インスティテュート）は、

徳川歴代將軍事典

大石 学編 家康から慶喜まで、15代の治世で読み解く江戸時代。約1000項目を収録する。13650円 [内容案内] 送呈

伊勢神宮を造った匠たち

浜島一成著 神秘のバールに包まれた、建築の伝統を守りつけた匠たちの1200年の姿。2415円

日本古代の歴史 全6巻

②飛鳥と古代国家

篠川 賢著 古代国家と飛鳥・白鳳文化が形成された6、7世紀日本の姿。(第2回配本) 2940円

朝鮮人のみの中世日本

(歴史文化ライブラリー-367) 関 周一著 衣服・髪型から倭寇、食事と酒、稻作の方法まで、社会・文化を見つめ直す。1785円

西南戦争と西郷隆盛

(敗者の日本史⑩第10回配本) 落合弘樹著 4度敗者、になった維新の英雄。薩軍の敗因を分析し、西南戦争を問い直す。2730円

日本海軍史 外山三郎著

かずかずの海戦の戦術・戦略から勝因や敗因を分析し、80年の歴史を描く名著。(読みなおす日本史)

現代日本政治史

①占領から独立へ 1945-1952 楠 純子著 講和と安全保障をめぐる戦後8年を描く。(最終回配本) 2730円 シリーズ全5巻完結

日本近代史を学ぶための文語文入門

古田島洋介著 漢文訓読体の地平 基礎から丁寧に、漢文訓読体を読み解く術を解説する。2940円

吉川弘文館

〒113-0033 東京文京区本郷7-2-8 電話03-3813-9151 / 備価5%税込

これによって、神々が共に日本の繁栄のために協力することとなつた経緯が日本神話に記してあります。

現在、テロ対策に四苦八苦している欧米諸国は、ようやくこの考えに到達しました。大衆を味方に囲んで安定化を図ろうとする「対反乱作戦（COIN）」という作戦理論です。また、その軍事教義は「安定化作戦」と呼ばれております。ただし、これが理論どおりに機能しないのは、眞に相手を思う気持ちが兵士一人ひとりに根付いていないからです。

神武天皇は、稻作という文化を与え、在るもの奪い合う文化ではなく、共に協力して稲穂を育て持続的に成長する文化を広め、まさに家族のような社会をつくろうとし、奈良の橿原に建国しました。この過程での戦いの目的は、「争い奪い合う」だけの文化を「共に生み成す」文化へと正すことをしました。

現在、日本各地にその土地のいろいろな神様を祭るお社が存在しているのは、勝者が敗者の尊厳や価値觀を踏みにじるようなことはしなかつた証左です。これ

「七人の侍」では、戦国末期の武人、上泉伊勢守信綱、塚原ト伝らの逸話を織り交ぜています。その戦国時代の様相は、『応仁記』によると『天下は破れば破れよ。世間は滅ばず滅べよ。人はともあれれないほど崇高なのです。

「七人の侍」では、戦国末期の武人、上泉伊勢守信綱、塚原ト伝らの逸話を織り交ぜています。その戦国時代の様相は、『応仁記』によると『天下は破れば破れよ。世間は滅ばず滅べよ。人はともあれ

文化の底流をなすもの

海外の方に日本の武道に心を惹かれた動機はと聞くと、「黒澤明監督の『七人の侍』を見て」と答える人が圧倒的に多いようです。彼らの常識からすれば、契約の破綻した武人が窮屈の民百姓のため命を捨てて戦う、ということは考えられないほど崇高なのです。

この年、至誠館がフランスで開催した国際武道セミナーには、フランス政府の青少年育成担当官が訪れ、「東日本大震災において日本人が実践したすばらしい公徳心を我々も見習いたい。それは武道教育によって身につけられるのか」と質問されました。私は、「あの時、被災地で、神のように振舞つた多くの人々の行為が、武道によって育まれたとは言えません。しかし、日本文化の底流をなす、そのような勇気ある公徳心を育むことが武道の目的であると思います」と答えました。

日本武道は、先の戦争後に禁止迫害され、その精神性を否定されました。しば

によつて、地方文化が失われず、自然と共生し、相互に助け合う伝統文化が今もなお守られてきたのです。

単に戦いを否定するのではなく、戦はしても決して敵意を残さない。戦を通じて敵対関係を逆に友好関係に変化させていく、というのが武の神様の物語のエンセンスです。それが、日本の武道を道義的な特性を備えたものとして形作つてきただのです。

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

点を重視し、「礼」を尽くして交渉にあ

たりました。交渉に応じずに戦を挑む神

に対しては、武力で圧倒しつも、相手

を殲滅するようなことはしませんでした。

交渉がつき相手が降参すれば、その尊嚴

を失わないように丁重に処遇したのです。

その起源は、日本神話にあります。現

代でも武道場の神棚に祭る「鹿島の神」

「香取の神」は、日本神話の「武神」として崇められています。鹿島の武神と「タケミカヅチノカミ」は、大国主神との度重なる交渉の失敗にもかかわらず、

強行策に出ることなく、「いかに相手の尊嚴を守りながら景意を得るか」という

らくして、G H Qの許可を得て再開した武道からは、伝統的精神性が薄れてしましました。しかし、「社会のため、人のため」真心を尽くして行動するという、日本人の底流をなす伝統的徳性は断絶することなく継承されてきたのです。

極端な利己主義による社会問題が続出

する現代において、日本武道が、「社会のため、人のため」真心を尽くして人生を貫ける人材を育成できるものであれば、それは日本が日本であり続けるため、そして、世界がよりよいものになるために、継承し守りぬく価値があるものと信じます。

世界を平和にする言語

津田 幸男

（筑波大学教授）

1950年神奈川県生まれ。南イリノイ大学博士号取得。長崎大、名古屋大を経て、現職。専門は英語支配論、言語政策、国際コミュニケーション論、著書に『本語防衛論』『日本語を護れ!』。

45

「日本語が危ない！」

こう考える人が徐々に増えている。まず、2008年に、作家の林望氏が『日本語は死にかかる』（NTT出版）で「日本語の乱れ」に対する懸念を表明した。同じ年に、同じく作家の水村美苗氏が『日本語が亡びるとき』（筑摩書房）で、英語支配により、日本のエリートた

ちが英語に引き寄せられ、日本語から離れて行き、日本文学の継承者がいなくなると警告した。そして、国語辞典の編纂を長年続けている国語学者の水谷靜夫氏は『曲り角の日本語』（岩波新書、2011年）で、「移り行くのが言語の常——それだけならよい。今の変わり方にあやしさを覚える」と述懐している。

3つの理由

まず第1の理由は「世界の言語が消滅しつつある」という事実である。今世界では絶滅に追い込まれて動植物や植物が多いが、同じことが言語にも起っている。一説によると、2週間に一つの言語が消滅している。ある言語学者は、21世紀末までに、最悪で95%の言

語が消滅すると予測しており、また別の学者は500年後には地球上にはたった一つの「世界言語」が残るのみだと予測している。現在消滅している言語は話者数が数百や数千の「先住民言語」がほとんどである。しかし、だからといって話者数の多い「国語」（日本語もその一つ）が永遠に磐石というわけではない。なにしろ「世界言語」である英語の影響力は絶大で、今でもすでに「国語」を脅かしている。フランスでは英語を初めとする外国語の使用を規制する言語法でフランス語を護っている。ポーランドでも「国語保護法」を制定し、ポーランド語を英語支配から護ろうとしている。

このように「国語」を法律で護らなければならぬほどに英語の勢いは強いのだが、日本では英語に対する警戒心がほとんどなく、日本語を護る体制がない。次に「日本人の外来信仰と無防備な国民性」が挙げられる。

日本人はいまだに「外来信仰」が強い。

特に欧米に対して。外国语、外国语が好きなので、街にもテレビにも英語があふ

れている。「NHKは外来語を使いすぎる」と訴訟が起きているほどである。NHKは「外来語を使うことは国際的だ。カッコイイ」と勧進しているのだろう。政府・官公庁も同類で、「コンプライアンス」「アカウンタビリティ」「ワークラウドバランス」などという英語を広めて悦に入っている。日本のマスコミ、お役所、学者はおしなべて「英語信仰」の熱心な信者で、まさに日本語を潰そうとしているかのようだ。

それほどに「外来信仰」が強くなるのは、日本人がもともと「無防備」な国民だからである。四方を海に囲まれ、アメリカ軍は別として、大陸からの侵略はな

く平和な時期が長かったので、外国人を警戒する防衛意識が育たなかつたといえども、日本では英語に対する警戒心がある。外国から見たら日本人は隙だらけである。しかし、資源の争奪戦が激化する現代ではそれでは通用しない。「外来信仰」と「無防備」では何も護れない。

日本語が消滅するかもしれない3つ目の理由は「言語戦略の不在」である。

日本には「言語政策」「言語戦略」が

前半の議論で、「日本語が消滅するかもしれない3つの理由」を明らかにした。それではどうしたらよいのか。それに答えるために「日本語を護るために3つの言語戦略」をこれから提案する。

まず一つ目の言語戦略は「大学で日本語を必修にして日本語本位の教育を開始せよ!」というものである。

日本語を護るにはまずは教育の改革が

かくいう私は長年「英語支配論」を開いてきた「英語支配の構造」（第三書館、1990年）、「英語支配とことばの平等」（慶應義塾大学出版会、2006年）など。そして、最近は冒頭のお三方と同じく、「日本語が危ない!」と考えるようになり、その懸念を著書にした『日本語防衛論』（小学館、2011年）。

その観点から、この稿では、前半に「日本語が消滅するかもしれない3つの理由」を、そして後半に「日本語を護るために3つの言語戦略」を論じ、日本語を護ることの大切さを明らかにする。『日本語を護れ!』（明治書院、2013年）。その観点から、この稿では、前半に「日本語が消滅するかもしれない3つの理由」を、そして後半に「日本語を護るために3つの言語戦略」を論じ、日本語を護ることの大切さを明らかにする。